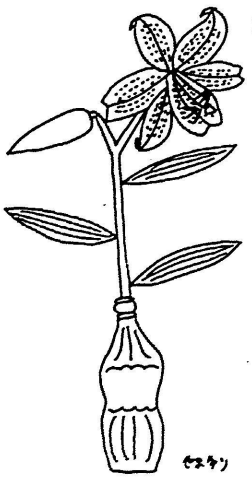
ファジー

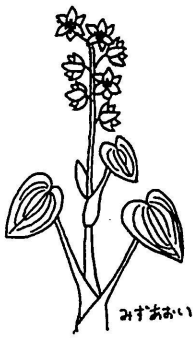
笹原　治

最近，ファジーという用語がはやっている。たとえば，ファジー洗濯機，ファジー炊飯器，ファジーエアコンなど。この「ファジー」という用語は「ぼやけた」，「あいまい」といった意味で，はっきりと区別をつけることができないことに対して使うものである。たとえば25℃以上なら暑い，以下なら涼しいというように区分したとしても人間の感覚に合わない。そこで，とても暑い，涼しすぎるといったあいまいな判断もできるようにしたのが「ファジー」なのだそうである。だいたい，世の中にある物事はほとんどすべて明確な区別をつけることはできない。たとえば，川と岸の区別。極論をいえば平野では川と岸の区別はつけられない。なぜなら，昔は平野では数年に１回洪水があり，低地は水びたしになる。このとき，川と岸の区別はない。このような極論をいわなくても常に水が流れているところ，雨が降り増水したときだけ水が流れるところ，数年に１回の大水のときだけ水が流れるところと移り変わっていくので川と岸の区別ははっきりしない。



こんなことをいうのは，先日，魚を飼育するための水槽に水草を入れようと思い，佐潟へ採集に行ったときのことである。手をのばせば簡単に水草を採れる場所を知っていたのでそこへ行ってみた。ところが，そこは公園として整備され埋め立てられていた。ぬかるみや壊れかかった船付場はなくなり，そして，ミズアオイの紫の花や水の中に茂るクロモの群れ，とげだらけのオニバスの葉は消え失せてしまった。代わって，茶色い粘土でぬりかためられた平面と鋭角的に地面と水面を切り分ける岸があった。もともと，水辺というのは陸でも水でもない「ファジー」あいまいな空間である。水辺では陸地にいる人が水中の水草の世界に直接手をふれることができる。しかし，公園にするための工事によって生まれたのは，水と陸の明確な境界線であった。人が水の領域に侵入することを拒否しているように見えた。この公園は市民が水に親しむことを目的にしていたのであろうが，皮肉な結果である。水と陸の間に境界線を引くことで土地の有効利用になるし，人は水のすぐそばまで近付くことができる。しかし，人と水は境界線によって隔離されてしまう。本来，はっきりと区別できない「ファジー」な物事に境界線をいれてしまったために思わぬ効果が現れたのである。

自然保護というと貴重な自然が残っている地域を保護区に指定しようと考える。しかし，保護すべき自然とそうでない自然を区別できるだろうか。保護すべき植物というと大抵の人は高山植物を連想するだろう。ところが，絶滅危惧種・危急種をレッドデータブックで調べてみると意外なほど高山植物は少ない。以前から高山は保護すべき地域に区分されてきたからである。それに対して絶滅の危機の迫っている植物は平野の湿地に生育しているものに多い。保護するまでもないと思っていた植物がいつのまにか絶滅の危機にさらされている。自然保護区を指定するのは大切なことであるがそこだけが貴重な自然であるわけではない。



人間生活と自然は対立するものと考え，人と自然の間に境界線を引いてしまう人たちがいる。つまり，大自然は神聖なものであり人の手がふれてはいけないのである。このような考えの人たちによると植物採集・昆虫採集などは悪事ということになる。特に，昆虫採集に対する風当たりは強く小学校で自由研究で昆虫採集をしたこどもが怒られることさえあるらしい。しかし，これでは人が自然と対話し理解することを拒否してしまうことになる。自然を愛好する気持ちが逆に人間と自然の間に見えない壁をつくってしまう。

現代人は何かというと○か×かはっきりしないと満足できないようである。環境保全というと基準値や指定区をつくっては，そこに入った・はずれたで大騒ぎする。しかし，自然保護は，人間生活の領域と自然保護区域を区分するが目的であるわけではない。むしろ，人と自然は「ファジー」な関係を保つようにしたい。

（グリーンシグマＫＫ）